

# 序 文

最近、子どもの体に関して、様々な問題がマスコミなどで取り上げられることが多い。こうした問題をみえてみると、一面的にとらえることが困難である。例えば、多く指摘される点としては、子どもの運動不足がある。理由は一様ではない。住宅環境の変化から、子どもが屋外で遊ぶことのできる場が減少しているとの指摘がある。また、ゲームなどの普及により、屋外で体を使って遊ぶよりも、屋内で多くの時間を過ごすようになってきている。塾通いなどに時間をとられ、外遊びの時間が十分にとれていないといった報告もある。こうした子どもの運動不足といった状況の結果として、体力の低下、運動能力の低下、骨折しやすいなどの問題が引き起こされている。このような側面は、比較的取り上げられることも多く、理解しやすい。ところが、同じ子どもの問題点として、過激な運動により体を壊してしまうような例も報告されている。サッカー、野球、あるいはクラシックバレエなど、限定された運動を繰り返すうちに、疲労骨折などを引き起こしてしまうような例である。

一方、運動が非常に不器用で、体育の授業で行う簡単な動作もこなすことが困難な子どももみられる。「発達性協調運動障害」といわれる子どもたちである。いわゆる「発達障害」に分類される診断名である。彼らの運動は、平均的な同年齢の子どもの平均値を逸脱し、日常生活においても困難を感じることもある。発達性協調運動障害の認知度はまだ低く、体育の授業において、特別な配慮を得られず、置き去りにされてしまうこともある。発達障害は増加傾向にあるとされており、現在見逃せない状況にある。

一口に子どもの運動といっても、様々な問題が混在している。問題には、運動の不足と過剰な運動という全く逆の要素が含まれる。また、発達障害という、一見把握しにくく、それでいて一部の機能が極端に遅れているといった問題も含まれている。

子どもは成長の過程にあり、どのような対応が必要か、慎重に配慮する必要がある。個々に機能も、思考も、環境も異なっている。この時期、子どもは大きく変化し、その後の運動の基礎を構築する重要な期間である。この時期に生じた問題点は、対応の仕方により悪い方向へ進む可能性もある。指導する側は、個々の子どもを的確に把握し、適切なプログラムを提供する必要がある。そのことで、子どもの運動発達を最大限に引き出すことが可能である。

本書は、子どもの運動に関して、「運動に必要な要素」「運動の問題点」「運動機能のチェックポイント」「運動指導法」に分けて説明した。子どもの運動指導プログラム立案を前提に、

運動の要素と問題点を解説し、これを踏まえた評価方法、運動チェックの方法を示した。最後に、具体的な指導方法を、運動要素と関連付けて詳細に述べた。子どもの資質を理解し、プログラム立案に直接的に役に立つ構成を心がけた。

著者一同、本書が子どもの運動指導の一助となり、発達段階の問題点の解決の糸口になることを希望する。

2018年4月

著者を代表して  
新田 収